

脂質生化学研究 Circular

1990

会員の目録と会費の
支払日

平成二年七月

会費の目録と会費の
支払日

会費の目録と会費の
支払日

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

訂正

色刷り4ページ目の総会、および
幹事会のお知らせの中で、日付を

平成二年7月6日

と訂正させていただきます。

また、色刷り1ページ目の「会費
払い込みのお願い」の中で、
平成元年度会費3000円とあるのは
平成二年度会費の誤りです。
お詫びして訂正いたします。

日本脂質生化学研究会
事務局

平成二年度会費払い込みのお願い

- 平成元年度会費 3,000 円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。
- 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口へ備えつけの用紙をご利用ください。振替の送料は事務局負担ですので赤い振替用紙です。
会費送付先 振替番号 東京4-91400 日本脂質生化学研究会
- 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金 2,000 円 + 平成二年度会費 3,000 円 = 合計 5,000 円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。
(事務整理の都合上、2年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)
- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり、或は他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。
- 所属の変更、あるいは外国長期出張の際は必ずご連絡ください。

事務局 (〒173) 東京都板橋区加賀2-11-1 帝京大学医学部第一生化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局 TEL (03) 964-1211
(内線) 2225, 2226

……………貴方の会費で運営されています

今日、お払い込みください……………

第32回研究集会発表演題の募集

第32回日本脂質生化学研究会・研究集会のお知らせ

① 演題の申し込み

発表15分討論5分を予定して居りますが、演題数によっては発表13分討論5分になる場合もあります。

申し込みには挿み込みの原稿用紙をお使いください。これは、このまま印刷になるのではありませんから、タイプでもワープロでも手書きでも結構ですが、黒で読み易く書いてください。

申し込み締切 4月10日(火)必着

② 審査ならびにプログラム編成

在京幹事、実行委員を中心に審査ならびにプログラム編成をおこない、改めて、講演集用原稿用紙をお送りいたします。(4月12日予定)。

③ 講演集用原稿締切 5月10日(木)必着

[申し込み、および講演集原稿送付先]

〒173 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学医学部第一生化学教室内

日本脂質生化学研究会事務局 宛

○ 会 場 : 日本都市センターホール

〒102 東京都千代田区平河町2-4-1

TEL 03-265-8211

○ 期 日 : 1990年7月6日(金)～7日(土)

○ 実行委員長 : 秦 霞 哉

〒160 東京都新宿区信濃町35

慶応義塾大学医学部内科

TEL 03-353-1211

○ 集会参会費 : 4,000円

○ 懇 親 会 : 1990年7月6日(金)夕刻

会費5,000円の予定

以 上

平成二年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を平成二年6月7日(金)、懇親会に先だって、懇親会場に於て開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 山 川 民 夫

- 議 題
1. 平成元年度事業報告
 1. 平成元年度決算報告ならびに監査報告
 1. 平成二年度事業計画ならびに予算案

以 上

平成二年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を平成二年6月7日(金)正午(プログラム編成上、若干の変異があるかもしれませんが)より日本都市センター内で開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願いいたします。

- 議 題
1. 平成二年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討
 1. そ の 他

会長 山 川 民 夫

- 幹事の皆様には別途、ご案内を申し上げます。
- 尚、昼食代1,000円を申し受けます。

木村雄吉先生を偲ぶ

山川民夫（東京都臨床医学総合研究所）

本会名誉会員木村雄吉先生には昭和63年の夏頃から呼吸器に御不例を訴えられ東京都老人医療センターに入院され、肺癌の疑いで、その後自宅療養を続けておられました。平成元年春過ぎから慶応病院に入院され本会会員の秦哉氏が主治医として治療に当たりましたが10月10日遂に不帰の客となられました。享年85才。先生は昭和40年の本会の年会（日佛会館）の実行委員長をお務め下さいましたが、本会会員で先生の門人として指導を受けた方は、前記秦氏の他、原一郎、永井克孝、武富保、牧田章、植田伸夫、飯田静夫、西村顕治の諸氏をはじめ、多数おられます。先生は仙台の旧制二高、東京医歯大予科、東大教養学部、東大伝染病研究所の教授を歴任され、夫々の時代、場所で多くの青年たちに学問のみならず、人生のあり方に大きな影響を与えられました。

私が昭和13年二高に入学した時、寮のコンパで先生に初めてお会いしましたが、当時、生徒の間では東京から赴任された許りの若い先生は美人と評判の高い奥様とともに大変人気がありました。二年生の時に私は動物学の講義を受けましたが、黒板の前にすっと立たれた瘦身の先生は独特の風格で新しい学問である生化学的な生物学を教えられました。Keilinのチトクローム、Warburg-Wielandの論争 Thunbergの脱水素反応などの話は不敏の私には理解できませんでしたが、それらの大学者の名前はマザマザと憶えています。何よりも生徒に大きな影響を与えたのはガマの解剖実習でした。実習に入る前に「観察」が如何に大事であり科学の基本であるかを教えるルイ・アガシーのエピソードを話された後、「今まで俺の講義して来た事なんかは風が吹けば皆吹っとなってしまうんだ。だがこれから君達が自分の眼で視、自分の手で触った事は、これは本物なんだ。」と言われたことを、まだ頭脳の柔らかかった若い私を後年実験科学の道に導いて下さった言葉として肝に銘じています。

先生は昭和3年東大理学部を卒業後、動物学教室で五島清太郎先生、合田得輔先生から新しい動物学への眼を開かれ、東大医学部生化学の柿内三郎先生、理研の飯盛里安先生の許で8年研鑽をつまれ、二高の阿刀田令造校長に請われて仙台に赴任された由でした。

先生は二高で研究室を持たれ、理研時代に始められた脳の糖代謝研究を続行され、ワールブルグのマノメーターを振る異色の教授であられたのですが、仙台の空襲でデータは全部焼失されたとの事でした。柿内教室では脳の各部位での脂質の違い、ケファリン（PE）の水素添加などの仕事をなされた様で、伝研ではその延長として永井、武富大学院生には Folch の方法で分画したリン脂質に関する研究や、実験的

会の活動状況

アレルギー性脳脊髄炎との関連で原因抗原とされるプロテオリビドの研究を指導され、その後その研究は彼らによって発展されました。先生はわが国における神経化学研究のいわば草分け的存在であったといえましょう。また、理研時代の放射能の生物に対する影響を調べられた研究も放射線生物学の我が国における走りでありました。

先生は伝研には昭和40年まで新設の細胞化学研究部長として10年間在籍されましたが私の属していた化学研究部（現在の部長は上代淑人氏）の部長もしばらく併任して下さいました。先生は東大教養学部時代には矢内原忠雄部長を援けて教養学科を設立した功労者ですが、過激な学生たちとわたりあったりされたそうですが、伝研に来られても先生を招いた心友の宮崎吉夫所長代理の急逝に遭われたり、当時の伝研は問題の多いところで御苦労が多かった様です。助教授から教授になった許りの私は困った事がある度に先生の教授室の扉を叩きいつもアドバイスをしていたゞきました。教授会では医科出身者ばかりの中でも先生は独特の雰囲気で一服の清涼剤の役目を果たされました。伝研時代は脂質の研究の他、脳の物質代謝における Potassium effect やエーリヒ腹水癌細胞を用いて Crabtree effect の研究が続けられ、定年間際には癌と免疫現象に強い興味を持っておられました。しかし、岳父近角常観師の浄土真宗の教えをバックに先生は決して急がれることなく、飽くまで御自分のペースで悠々と仕事をなされ、無暗に焦って仕事をしがったり、争い事を好む若い研究者に無言の教訓をたれました。

退官後、本会の設立者の安田守雄先生が学部長をなさっていた実践女子大学で一年ばかり教鞭をとられました。もうそういう仕事は沢山と、自宅の求道学舎にこもって亡くなられるまで、読書と散歩の毎日でした。その間教養学科の教え子である永井、武富、秦、伊藤、金子、田中らの諸氏が先生宅に集まって白雄会と称して L. L. Whyte の自然哲学の本などを読まれその翻訳を出版されたり、古典ギリシャの生化学思想その他いくつかの著述も刊行されました。いずれも怠け者の私には難解で、時折お宅にお邪魔しても、そういう話題は敬遠して専ら俗世間の話をしましたが、面白そうに相手をして下さいました。先生は秋田県大川村で生まれ山形高校を出た東北人ですからある面ではシャイで、世間にもてはやされる様な派手な振舞いは好まれず、内に秘めた生命についての思索を深める事に集中しておられたと思います。従って現今流行の「バイオ」とは無縁と思われる、知る人ぞ知るといふか、ものを考える人のみ理解できる著作群を残されたのではないかと読みもしないのに想像する次第です。

いずれにせよ先生を失って闇夜に灯が消えた思いをされている方が多いように思われます。（2月15日）

① 第31回日本脂質生化学研究会・研究集会の開催

第31回研究集会に関しては実行委員長の藤野教授の文章がありますので、会としての記録もそれにかえさせて頂くことにする。（14頁参照）

藤野教授のご苦勞に感謝を表します。また会員でないにもかかわらず、会場の準備等すべての面でご面倒をおかけした神戸学院大学梶本五郎教授に厚く御礼申し上げます。

② 第31回日本脂質生化学研究会総会

平成元年7月22日午後6時より神戸学院大学で開催された。

総会の次第および議事内容は次の如くである。

イ) 挨拶

山川会長

ロ) 平成元年度事業報告および決算の承認を求める件

植田幹事

平成元年2月に発行されたサーキュラー（1989）に掲載された平成元年度の事業報告、決算の内容が説明され、拍手をもって承認された。但し会計監査報告は後日別途行なわれることで了承された。

ハ) 平成元年度事業計画および承認を求める件

植田幹事

同じくサーキュラーに掲載された事業計画および予算案について説明がなされ拍手をもって承認された。

ニ) 平成3年度研究集会実行委員長決定の件

山川会長

幹事会での投票の結果にもとづき、鬼頭誠幹事（京大・食研）にお願いしたい旨提案され、拍手をもって承認された。

以上で議案を終了し、平成二年度の実行委員長 秦幹事（慶応大・医）より挨拶があり、来年の研究集会に多数の会員が参加されるよう要請された。

尚、総会后、ただちに懇親会が大学食堂で開催され、席上神戸学院大学学長先生よりご挨拶を頂いた。研究集会に新築の素晴らしい会場をお貸し頂き感謝にたえない。

③ 平成元年度第一回幹事会

日時 平成元年7月22日午後0時30分～1時30分

場所 神戸学院大学 会議室

出席者：(略)

議事内容

1. 植田幹事より、昭和63年度の事業報告、決算、平成元年度の事業計画、予算の説明があり(サーキュラーに記載済み)それを了承した。ただ会計監査を終えていないので、監査を終了しだい別途報告することで了承された。
2. 山川会長より、会長、庶務幹事、会計監査の任期は平成二年12月迄あるので、この任期は現行の体制で全うする。その後の運営業務をどうするか議論をしたい。と発言があり、庶務幹事を引き受ける人の立候補を求めた。
それに対し、赤松、永井、堀幹事より植田庶務幹事の再任を求める発言があった。事務経費を増額することも必要と発言された。飯田幹事は学会センターに事務を委託しては如何かと提案があった。これに対して植田庶務幹事より既に学会センターより事務委託についての見積りを貰っている。会員名簿管理、会費収納、会計の業務で約160万円必要。サーキュラーや講演集製作まで委託すると、会費を7,000～8,000円にする必要がある旨発言があった。
安藤、矢野幹事より基礎老化学会、医用マス学会の運営が分担で行こなわれている実情の説明があった。植田幹事より平成2年度は現行の体制で運営し、2年目の幹事会に新しい体制の提案とする旨の発言があり、その方針を了承した。
3. 山川会長より、実行委員長の決め方について、いろいろな提言を受けた。平成2年は桑幹事をお願いしてあるので、平成3年の実行委員長を引き受ける人の立候補を求めた。しかし立候補者なく投票で決めることとし、単記無記名投票の結果、鬼頭幹事が最多数を得た(14票、次点は9票)。後程、鬼頭幹事は結果を了承し平成3年の実行委員長を引き受けられた。
4. 林幹事より、脂質データベースの報告があり、協力の要請があった。山川会長より、いろいろな意見を林幹事に申し出て欲しい。協力要請があれば協力して欲しいと発言があった。
5. 桑幹事より平成二年度の研究集会を都市センターホールで開催する旨報告があった。

④ 平成元年度第二回幹事会

日時 平成元年12月12日 午後6時30分～8時

場所 学士会館分館(東大赤門前)

出席者 山川民夫(会長)、赤松 謙、安藤 進、石塚稲夫、伊藤俊洋、植田伸夫
大島美恵子、川口明彦、児島英也、渋谷 勲、鈴木明身、脊山洋右、塚谷博昭
内藤周幸、二木鋭雄、飯田静夫、桑 葭哉、林 陽、藤野安彦、村松敏夫
和久敬蔵、島崎弘幸(事務局)以上22名。

議事内容

1. 平成元年度事業報告(案)について
植田庶務幹事より(別掲)の説明があった。
2. 藤野幹事より、第31回研究集会について報告があった。同研究集会への参加者305名、講演題数96題、モーニング・レクチャー4題であった(別紙2)。
また、藤野幹事より、本会では“実行委員”と言う名称を使用しているが、会を主催するにあたって、対外的な折衝の際は“実行委員長”と言う名称の方が良いという意見が出され、今後特別な事情のないかぎり“実行委員長”と言う名称を使用することとした。
3. 第31回研究集会の報告を次年度のサーキュラーに載せることとし、原稿は藤野幹事をお願いすることとした。
4. 林幹事より、脂質データベース作成について、脂質生化学研究会や、油化学協会の会員(29名程)をお願いして作成準備が進んでいるとの報告があった。
山川会長より、脂質データベースの作成について、本会は付かず離れずの立場をとっており、現状では本研究会の事業として取り組んでいる訳ではない。しかし、外国でも例の無いデータベースの作成であるので協力して欲しいとの追加発言があった。
5. 平成2年度事業計画(案)について
植田庶務幹事より説明があった(別掲)。
6. 第32回研究集会の準備状況について、桑実行委員長より報告があり、了承された。
(詳細はサーキュラーに記載)
7. 講演予稿集用原稿は、従来からの手書き用の升目原稿用紙を用いているが、ワープロが発達した現在、升目のないワープロ用の原稿用紙を渡し、字数その他の形式を指示して統一するように検討してはどうかと言う意見があった。庶務幹事を中心に検討する。
8. 昨年度の講演集は印刷が悪く読みにくかった、現行より多少費用がかかっても見やすいものにしてほしいと言う意見がだされ、庶務幹事を中心に検討することとした。

9. 山川会長より、藤野安彦幹事を次年度新たに名誉会員として推薦したいとの発言があり、了承された。
10. 平成元年12月をもって任期の終了しする幹事には、引き続き幹事をお願いすることとし、事務局より依頼の葉書を発送することで了承した。
尚、小峰幹事からは幹事辞退の申し出があり、承認することとした。
新幹事に、山本 章、山本尚三幹事より推薦のあった国立循環器病センターの田辺忠氏を承認し、事務局より依頼の葉書を発送することとした。また、植田庶務幹事より、本会会員でない人が幹事に推薦された場合、どの様に対応するべきかと言う発言に対し、幹事は会員から選出するということを確認した。
11. 平成2年度末で任期の終了する会長、庶務幹事、会計監査について、現行のまま次期総会に推薦することを了承した。
12. 村松、脊山幹事より、次年度予算案の事務経費20万は30万円として事務局における必要経費として認めたいとの提案があり、了承された。
13. 本幹事会に欠席された幹事のうち、武富幹事、林（浩）幹事、奥山幹事、山本（尚）幹事（順不同）より、幹事会のあり方についての提言があり、植田庶務幹事より報告された。今後の検討課題とした。

⑤ 平成元年度事業報告（平成元年1月1日～平成元年12月31日）

1 平成元年度事業報告

○ 会 員	正 会 員	9 2 8 名 (63年度 8 9 6 名)
		元年度新入会 5 4 名
		” 退 会 2 2 名
	名誉会員	1 3 名 (木村雄吉氏10月23日死去)
	賛助会員	2 3 社
○ 役 員	会 長	山 川 民 夫
	庶務幹事	植 田 伸 夫
	会計監査	野 島 庄 七
	幹 事	7 6 名

○ 事 業 1. 第31回研究集会の開催

7月22日(土) 23日(日) 於 神戸学院大学

実行委員長 藤 野 安 彦 氏

参 加 人 員 一般演題 9 6

レクチャー 4

計 1 0 0 題

2. 脂質生化学研究31巻発行

本文 4 0 6 頁

3. 脂質生化学研究 circular 1989 発行

本文 3 3 頁

4. 会 議 総 会 7月22日

幹事会 7月22日

” 12月12日

脂質データベース作成作業文部省科研費

2 平成2年度事業計画

○ 会 員 正 会 員 微増の見込

名誉会員 1 4 名

数野太郎、永井諄爾、山崎三省、山添三郎、原 一郎

高橋善弥太、坂上利夫、金田尚志、今井 陽、堀 太郎

野田万次郎、松本 亮、山川民夫、藤野安彦

賛助会員 エーザイ株式会社 株式会社東京化学同人

株式会社大阪細菌研究所 東京田辺製薬株式会社

株式会社大塚製薬 株式会社東京プリント印刷

小野薬品工業株式会社 東 ソ ー 株 式 会 社

花 王 株 式 会 社 富山化学工業株式会社

共立出版株式会社 三 共 株 式 会 社

日本ルセル株式会社 塩野義製薬株式会社

藤沢薬品工業株式会社 株 式 会 社 資 生 堂

株式会社ヤクルト本社 住友製薬株式会社

山之内製薬株式会社 第一製薬株式会社

雪印乳業株式会社 大日本製薬株式会社

㈱ ジャパンバイオ研究所 (2 3 社)

○ 役 員 会 長 山 川 民 夫 平成 2 年 12 月 31 日迄
庶務幹事 植 田 伸 夫 “
会計監査 野 島 庄 七 “
幹 事 (任期平成 2 年 12 月 31 日迄)

木村修一, 塚谷博明, 高野達哉, 二木鋭雄

(任期平成 3 年 12 月 31 日迄)

秋野豊明, 荒木英爾, 安藤 進, 板坂 修, 大橋昌子,
奥田拓道, 川口昭彦, 鈴木明身, 玉井洋一, 中野益男,
西村顕治, 野間昭夫, 水柿道直, 和久敬蔵, 赤沼安夫,
猪川嗣郎, 井上圭三, 遠藤 章, 奥山治美, 小野輝夫,
青山洋右, 野沢義則, 武藤泰敏, 渋谷 勲, 松原淑子,
大島美恵子, 谷口直之, 岡本光弘, 伊藤俊洋

(任期平成 4 年 12 月 31 日迄)

赤松 稔, 植田伸夫, 小倉道雄, 香月裕彦, 日下喬史,
楠瀬正道, 児島英也, 斎藤国彦, 武内 望, 武富 保,
千田信和, 内藤周幸, 永井克孝, 野島庄七, 橋本 隆,
林 陽, 林 浩平, 原島圭二, 飯田静夫, 平山 修,
藤野安彦, 穂下剛彦, 牧田 章, 村松敏夫, 山下 哲,
山田晃弘, 山本 章, 藪内百治, 菅野道廣, 秦 霞哉,
三成 脩, 北 徹, 加納英雄, 上田隆史

(平成 5 年 12 月 31 日迄)

猪飼 篤, 石塚稲夫, 鬼頭 誠, 矢野郁也, 山本尚三,
伊藤精亮, 石橋輝雄, 池沢宏郎, 田辺 忠

- 事 業 1. 第 32 回研究集会の開催
平成 2 年 7 月 6 日 (金) 都市センターホール
7 日 (土)
実行委員長 秦 霞 哉 氏
2. 脂質生化学研究 32 巻の発行
3. 脂質生化学研究 circular 1990 年の発行
4. 総 会 7 月 6 日 (金)
幹事会 7 月 6 日 (土) 12 月 (未定)

— 中間報告 —

脂質情報データベース

構築実行委員会

委員長 林 陽

平成元年度の科研費が支給され, 本格的なデータ収集を始めています。現在までの進行状況は以下の通りです。

- 1) 日本脂質生化学研究会の幹事を中心にデータベース構築の協力をお願いしたところ, 29 名の協力者が得られ, 脂質に関する各種データを収集中である。
- 2) 本年度は, 磷脂質および糖脂質を中心にデータを収集する。
- 3) 現在まで, 糖脂質, 磷脂質を中心に, 約 210 件の化合物のデータが蓄積されている。
- 4) 国内でのデータの配布を考えて, まず, 最も普及し, 簡単に操作できるパーソナルコンピュータでのデータベースの設計とデータの提供を, データベースソフト dBASE (日本アシュトンテイト) を使って検討を行っている。
- 5) 12 月 1 日に, 平成 2 年度の科研費を申請した。
- 6) 平成 2 年度は, 主に中性脂肪, 脂肪酸, 胆汁酸のデータを収集するとともに, 磷脂質, 糖脂質のデータの充実を行う予定である。

以 上

3 平成元年度収支決算と二年度決算案

収 入 の 部	平成元年度		平成二年度
	予 算	決 算	予 算
正 会 員 会 費	2,100,000	2,190,000	2,200,000
入 会 金	100,000	108,000	100,000
賛 助 会 員 会 費	440,000	420,000	440,000
講 演 集 売 上 げ	150,000	116,000	120,000
広 告 収 入	800,000	852,550	850,000
利 子	200	316	316
寄 付 金	0	0	0
雑 収 入	0	0	0
小 計	3,590,200	3,686,866	3,710,316
前年度よりの繰越金	1,613,673	1,713,873	1,972,510
計	5,203,873	5,400,739	5,682,826

支 出 の 部	平成元年度		平成二年度
	予 算	決 算	予 算
研 究 集 会 補 助	500,000	500,000	500,000
会 報 製 作 費	260,000	341,440	341,440
講 演 集 製 作 費	1,650,000	1,522,600	1,650,000
旅 費	100,000	90,300	100,000
郵 送 料 ・ 通 信 費	500,000	554,310	550,000
会 費 収 納 経 費	35,000	32,900	35,000
事 務 用 品 費	50,000	11,502	20,000
会 合 費	120,000	124,181	120,000
謝 金	60,000	15,000	60,000
総 会 経 費	5,000	6,000	6,000
事 務 経 費	200,000	200,000	300,000
雑 費	10,000	30,000	30,000
小 計	3,490,000	3,428,229	3,712,440
次年度への繰越金	1,713,873	1,972,510	1,970,386
計	5,203,873	5,400,739	5,682,826

思い出することなど — 第31回研究集会をめぐって —

藤 野 安 彦

散会したあとの人けの少ないロビーで、ぼくはひとりコーヒーを啜っていた。長年の宿題を果たした感慨にまじって、懐旧の思いが胸の底から沸き出てきた。そうだ、あれからもう30有余年になる。

国際脂質生化学研究会誕生のころ

1953-5年、ぼくはカーターさん（イリノイ大）の所にいた。'54年の晩秋。浮田さんは帰り、ランズ、ロウ、スウィーリーさんらは大学院を卒えて他大へ転じていた。ある日カーターさんが室に来て、翌年の第3回国際生化学会（ブラッセル）か第2回国際脂質生化学問題討論会（現International Conference on the Biochemistry of Lipids = ICBLの前身、гент）に演題を出そうという。中身の濃そうな後者へ申込みことにする。さあ、スフィンゴシンの立体構造の決着を急がねばならぬ。在米ふた冬めの日々はあわただしく過ぎて行った。

'55年7月下旬、太西洋をこえてベルギーに入る。当時はまだプロペラ機だった。会場のгентは北西域の工業都市で、北欧の夏の日射しは柔かだった。割当てられたホテルにはクレンクさんも奥さん、息子さん連れて泊っていた（後年ケルンにご遺族を訪ねて往時を偲んだ）。食堂では、リネンさんの人なっこい笑顔にもよく出会った。

集会は盛況だった。オチョアさんがよく発言している。ぼくらの発表の朝になってもカーターさんは姿を見せなかった。大丈夫かい、とラポートさんが気遣う。直前にカーターさんが駆けこんだ。強風雨で航空便が乱れたとのこと。当時はよくあることだった。ぼくの番が来て、スフィンゴイドのエリスロ配置について述べる。外国での初舞台だった。スレオ配置の可能性について質問が出る。ぼくの懸念でもあったが、カーターさんはうまく応待していた。膝がバイプレートしなかったかい、とカーターさんがユーモラスにねぎらった。

オルガナイザーのライセン（'01-'79）さんが、会の規約を作る委員会に出てくれ、という。ライセンさんは州立гент大の薬学畑の教授で、この集会のそもそもの提唱者だ。

中脊初老、実直な世話役タイプの紳士だった。オブザーバーとして末席に連なり、耳を傾ける。コミティはポブヤクさんが司会役で、空気は騒然としていた。どの項目にも談論が風発し、ポブヤクさんはしきりにハンマーで卓盤をたたいては制していた。この委員会で各国から代表（連絡者？）を出すことになる。日本からは誰かというので、安田さんの名をあげ、「」としておいてもらった。この脂質集会の直後ブラッセルで国際生化学会議が行なわれた。日本からは赤堀さんが代表で来ていた。この経緯を話したら、そのまま代表安田でいいと思う、と温容で言われる。日本での煩わしさを避けたいふうだった。さっそくライセンさんに伝える。先にぼくの書いたYasudaのYの崩し方がGと間違われていたらしく、Dr. Gasudaにタイプされていたのを訂正できたのは一得であった。ここのエピソードは、あとで2、3人に話したことがある。舟橋さんは、面白そうにうなづいていた。

この第2回脂質集会が実質的な設立総会だったように思う。これにより、ICBLはこの後はほぼ毎年主としてヨーロッパのどこかで開かれることになる。^{1,2)} 当時は、生化学がそうであったように脂質生化学も興隆期であった。

日本脂質生化学研究会発足のころ

帰国して安田さんを北大に訪ね、ライセンさんから託されたICBLの書類を手渡した。大げさにいうと、これがわが国にICBLの情報が伝えられた最初であったことになろう。ぼくは渡米前のある時期、安田さんの所にいた。そこで大野さんの手引でスフィンゴミエリンの構造の一端などを調べたのだった。脂質研究は、日本では戦前から農、医、工等の各領域でそれぞれ着実に進められてきた。^{3,4)} 生化学（＝日本ではほぼ医化学）の分野に関する限りでは、安田教室が戦後の当時はそれなりに活発であったと言える。ぼくが安田さんを代表に推したのは決して身びいきからではなかったと思う。安田さんは、脂質時代の幕あけかな、と慈顔を綻べた。あとはお任せします、と言ってぼくは草深い帯広の地に帰任した。

辺域の新設大学では、留守中の用務の整理が多端であった。そのなかで、在米前後の数報が農化賞の対象になったのは偉幸だったと言える。'59年にミードさん（UCLA）から、脂質研究の国際的システム？をつくる構想に加わらないか、という誘いが来た。ちゅうちょしたが、スフィンゴイド構造の確認研究が出来そうなので応ずることにする。渡米の前に札幌に立寄ったら安田さんが、第6回ICBL（マルセイユ）に行くことにしたよ、と言

っていた。この集会での感触がひとつの引金になって、脂質生化学研究会（現Japanese Conference on the Biochemistry of Lipids = JCBLの前身）発足の準備が進められたようだ。^{5,6)} '61年にこれの第1回集会が開かれたことが、風の便りでロサンゼルスにぼくの耳にも伝わって来た。

UCLAには色いろの脂質学者が訪ねてきた。ベンソン、デブーフ、ケネディさんなど。ぼくはどうやらスフィンゴイドのエリスロ配置を確定できて、'62年の米国の生物系学会（アトランティック・シティ）で発表した。この前後にケイツさんと知り合った。同じ年令のこともあってその後親交を重ねることになる。'62年秋に帰国したら、早速JCBL（東京）の集会に誘われた。第4回ということだった。ここで、ぼくはJCBLとの絆ができたわけである。

ICBL・JCBLとの淡いつきあい

ICBL, JCBLとの因縁は浅くなく、関心はむしろ深かったが、北辺の遠地からの付き合いは、ICBLはもとよりJCBLでもそうたやすいことではない。加えて、ぼくらの研究環境の変化があった。折から日本は高度成長期で、その波は大学にも及び、われわれの所にも農産化学科ができ、修士課程がつくられ、ぼくは食品化学の講座を担当することになった。ほとんどが食品企業方面に進む学生達に、スフィンゴ脂質ばかりというわけにもゆかぬ。テーマは自ずと食品油脂、脂質一般に広がらざるを得なかった。いつか主題は、スフィンゴ脂質の一脈は保ちつつも、農畜産物脂質ことに主食である穀物の脂質に傾いていった。これらのささやかな歩みの集積が、のちに日本農学賞などの栄につながったのは、ひとえに教室の新旧の仲間達の功績である。ぼくらの発表のホーム・グラウンドは農化会なので、ここに顔を出すとそれがもう精いっぱい、他の学会に若い人達の分まで旅費の上面をするのは容易ではなかった。勢、ICBLはニュースだらけJCBLもせいぜい隔年参加位のことにならざるをえなかった。その埋合わせに（?）、米訪セミナーのチャンスはつとめて作るようにし、また招請セミナーには出来るだけ応ずるようにした。国内、国外からの脂質来講者はおそらく30人をこえただろう。ケイツさんは3度も来た。その縁で教室の根岸、伊藤さんらはオタワに遊学したのだった。飛行機嫌いのぼくも'75年に国際穀物脂質シンポジウムに招かれてからは観念して、ほとんど毎年、内外のどこかの脂質を主とする学術集会に出るような仕儀になって今日に至っている。

第31回集会のあとさき

淡いつき合いなりに、ぼくとしては帯広のベース・キャンプで脂質集会の準備をしたい気持ちを心の片隅に温めて来た。よそでお世話になるお返しのつもりもあったが、むしろ種をまいたあとの水をやるような気持ちからである。けれども、遠地では人びとの出足も鈍かろうという懸念のほかに、近年はスタッフが相次いで外に出たり、ぼくが学内雑務を兼職させられたりで、開催のエネルギーはなかなか集約できなかった。とうとう、そのまま定年を迎えることになってしまう(記念冊子などは余り派手にはしなかった)。たまたま父祖の地の兵庫県で職をえた機会に、実行に移すこととした。手勢がないので、今はやりの学会業者にほとんど任せる形にし、'89年7月22日(土) - 23日(日)に神戸学院大学で第31回集を開く段取りに漕ぎつけた。会場は、梶本さんのご高配による。前年の'88年はJCBL(東京)に加えてICBL(東京)、世界油脂会議(東京)も行なわれた次第なので、今回は諸事に簡素と省エネを心掛け、前夜祭、外人講演などはしなかった。それでも地元の人びと、関西地域の会員、事務局などからはそれなりに大小の協力をいただいた。厚くお礼を申しあげる。

両日快晴、猛暑。参加者305名。演題は一般講演96、モーニング・レクチュア。前者は例年のように複合脂質が主勢であと酸化脂質、脂肪酸、プロスタグランジン、ステロイド、リポタンパク質など。後者は近畿地区の定年教授の講話(松下さん:抗酸化能、堀さん:無脊椎動物の糖脂質、香月さん:酵母ステロールの生合成、藤野:天然糖脂質の全体像)であった。懇親会には143名が集まり、昼間以上の賑わいで、奮発したはずの名産明石鯛が不足するほどだった。集会前後に神戸・須磨、明石、姫路などの景観を楽しんだ会員も少なくなかったようである。

ICBL, JCBLへのたわごと

第2回のInternational Conference on the Biochemical Problems of Lipidsの案内をもらったときは、少々くどい位にいい名称だなと思ったことだったが、なるほど雰囲気は、固くるしいcongress(会議)ではなくて、気さくなconference(集会)の感じだった。そのICBLとなり('60)、会長制ができ('65)、運営組織も確立された('85)が、この懇話会ふうの性格は現在まで続いて来ているように思う。参加人数を抑える、ひとつの会場で討議する、プロシーディングスを出さない、などはその表われと言える。反面それゆえの気ままな所もないではない。必ずしも毎年開かれなかったり、開催

の予定がふいに変わったり、当事者がいない席で会場を決めたりなどのことが間々あった。こんなのはご愛嬌だが、ICBLができてから今日まで会場がほとんどヨーロッパ圏内というのは少々奇異な感じでもある。'53年以来36年、30回の間にヨーロッパ以外ではエルサレム('67)と東京('88)だけだった。トピックスに植物や微生物脂質が少ないのも佗しいことだ。名実ともに「インターナショナル」であってほしいものである。

JCBLは、ICBLを下敷にしてできた日本版の勉強会だ。順調に歩みをつづけ、'61年以来28年、31回の間に、「学会」にはない良さと相応の役割を果たして来たと思う。だが一方、「同好会」的な気易さも少なくはない。それは長所でもあろうがまた弱点でもあろう。このごろJCBLの運営方式について取り沙汰されているポイントもこの辺にあるかと思われる。当分は今の態勢のままで行くのでよさそうだが、やはりあり方としていつかは、たとえば、専従の事務局をおき、会長なども原則として持廻るなどのこと(たいていどこでもしていること)を考えてもよいのではあるまいか。

ICBLもJCBLも広場は生化学だが、脂質そのものは他にも理、農水、工などにさまざまな顔や領域をもつ。バイオテクノロジーは世の流れでもある。3~4年に一度くらいは脂質科学工学会議とでもいった脂質の総合祭典(?)があってもよさそうな気がするがどんなものだろうか。

たわごとがいよいよ本ものになりかけたころ、ロビーの向うに何人かの笑顔が見えた。同窓の連中だ。これから慰労と久闊の盃をあげようというのである。炎熱の陽はようやく西に傾いて、ビールに傾合いの夕景が明石の街並にゆったりと広がりはじめていた。

(セミ・レポートのつもりで、文中敬語はなるべく避け、名前はすべて「さん」付けとした)。

参 考

- 1) 山川民夫:本誌(Circular), 1980, 14-19.
- 2) 脊山洋右:本誌(Circular), 1987, 8-11.
- 3) たとえば神立誠:日本農芸化学会誌, 臨時増刊「農芸化学の100年」, 53-76 (1987); 藤野安彦:同誌, 131-5 (1987).
- 4) たとえば日本の化学百年史, 日本化学会編, 東京化学同人, 東京(1978), p. 570-3.
- 5) 安田守雄:本誌(会報), 1974, 9-13.
- 6) 原一郎:同誌, 1982, 冒頭記事(2ページ).
- 7) JCBL事務局:同誌, 1978, 7-10.

(1989. 12. 30 記す)



第30回国際脂質生化学会議 (ICBL) に参加して

東京大学医学部栄養学教室 脊山洋右

第29回ICBLを東京で開催してから1年半が過ぎようとしているが、その間、昨年9月26日から29日にかけて第30回カンファレンスがイタリアのストレーサで開かれた。

ストレーサはミラノの北方、スイスとの国境に近い小さな保養地で、美しいマギオーレ湖に面している。ペラ島をはじめ歴史を秘めた2、3の小島がアルプスの山々を背景にたたずむさまは一幅の絵をながめるような思いがした。

このストレーサは夏の間、観光客でにぎわうが、秋の訪れとともに閑散としてしまうところから国際会議場をつくってシーズンオフをなくそうというもくろみである。

東京での会議には300人近くが参加したのに比べ、今回は130人とこじんまりしたものとなり、いささか寂しい感がなきにしもあらずであった。日本からは池沢宏郎、入谷信子、大島美恵子、林 秀徳、藤井達三の諸氏と小生の6人が参加した。主催者側であるイタリアからの参加が少なかったのが特徴で、同じ時期にリボタンパク質やコレステロール、動脈硬化等の関連学会が開かれたのが裏目に出たようである。

今回取り上げられたテーマは1.メバロン酸からの代謝経路、2.アポリリボタンパク質の分子生物学、3.脂質代謝異常、の三項目であった。開会講演はオーストリアのUtermannによって行われ、動脈硬化を引き起こすLp(a)リボタンパク質のアポリリボタンパク質についての遺伝子解析が語られた。2日目はBloch による"ステロール分子の構造と機能"という招待講演で始まり、48題の口頭発表と43題のポスター発表が行われた。個々の発表についての紹介は省くので、関心のおありの方は上述の諸氏からAbstractを借り受けて戴きたい。

なお、第31回大会は本年9月4日から7日にかけて西ドイツのミュンスターにて開催される(別添資料参照)。

ICBLの組織について

第30回大会開催中の1989年9月28日、ICBLの理事会が開かれ、役員の変更が行われた。8年間会長を務めたG.A.Garton氏が引退し、A.R.Lagrou氏が後任会長として選出された。任期は4年である。同氏はベルギーのアントワープ大学医学部の分析化学教室の教授である。

事務局長はG.Galli氏が再任され、今後4年間務めることになった。

その他の理事会の構成員は以下の如くである。

理事: J.Bremer、K.Norum、J.N.Hawthorne、D.White、

S.Nojima、Y.Seyama、B.Berra、A.Catapano

顧問: K.Bloch、R.Paoletti、L.L.M.Van Deenen、G.A.Garton、

F.Paltauf

連絡委員: R.R.Brenner、R.L.Hood、Y.Nagai、A.Sanghvi、

D.N.Brindley

今後の予定

第31回 西ドイツ(1990年)

第32回 スペイン(1991年)

第33回 ソビエト連邦(1992年)ただし1990年3月末までに連絡がとれない場合にはキャンセルする。

第34回(あるいは第33回) フランス(1993年あるいは1992年)

その後については次回の理事会にて検討することとなった。

31st International Conference on the Biochemistry of Lipids



September 4-7, 1990

Münster, West Germany

Correspondence

31st ICBL
c/o Department of Biochemistry
University of Münster
Wilhelm-Klemm-Str. 2
D-4400 Münster, West Germany
Phone (0)251/833200
Fax (0)251/832090

Scientific Program

The topics of the Conference will be

1. Lipid flow and cellular lipid carriers
2. Lipid mediators and signal transduction
3. Lipoprotein-receptor interactions

The topics will be treated by plenary lectures. Shorter communications will be selected from contributions that are offered as poster communications so as to complement and extend the program. Poster communications may be related to the topics of the conference or to other areas of lipid biochemistry and molecular biology. Special attention will be given to the discussion of posters.

第1条 名称

本会を日本脂質生化学研究会 (Japanese Conference on Biochemistry of Lipids, JCBL) と称する。

第2条 目的

本会は脂質の領域における化学的、生化学的研究の発展、向上を図り、あわせ研究者相互の連絡および親睦を深めることを目的とする。

第3条 事業

本会は、第2条の目的を達成するために次の事業をおこなう。

- (1) 研究討論会の開催
- (2) その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第4条 会員

本会の会員には次の種類がある。

- (1) 正会員は、脂質の化学的、生化学的研究に従事し、本会で定めた会費を納入する者
- (2) 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会を維持することに協力し、本会で定めた会費を納入する者
- (3) 名誉会員をおくことができる。名誉会員は幹事会の推薦により、総会の承認で決定される。名誉会員の会費は免除される。

第5条 役員

本会は、その運営のために次の役員をおく。

- (1) 会長1名、庶務幹事1名、会計監査1名、幹事若干名をおく。
- (2) 会長、庶務幹事、幹事は幹事会を構成し会務の一切を処理する。幹事会は決定事項を総会に報告し、その承認を得るものとする。
- (3) 会長、庶務幹事、会計監査の任期は2年とし、幹事の任期は4年とする。重任はさまたげない。

- (4) 名誉会長をおくことができる。名誉会長は幹事会に出席して意見を述べる
ことができる。

第6条 総 会

総会は、会長がこれを招集し、次の事項を審議し、決定または承認する。
決定または承認は、総会出席者の半数以上の合意を必要とする。

- (1) 予算および決算に関する事項
- (2) 幹事会の提案事項
- (3) 幹事会の決定に関する承認事項
- (4) その他

第7条 経 理

本会を運営するため、次の如く経理をおこなう。

- (1) 本会の事業年度は、1月1日より翌年12月31日とし、予算および決算を会報に掲載する。
- (2) 経理は会計監査によって、監査される。
- (3) 当該年度の経理状況は、総会に報告され、その承認を得るものとする。
- (4) 本会の経費は会費および寄附金による。

第8条 事 務 局

本会は会務に関する一切の事務をおこなうために事務局を置き、庶務幹事がこれを運営して、会員に便宜を供する。

附 則

- (1) 本会則は、総会の承認を経て変更することができる。
- (2) 本会の会費は、幹事会で決定し、総会の承認を得るものとする。
- (3) 本会の事務局は、帝京大学医学部生化学教室に置く。

(〒173) 東京都板橋区加賀2-11-1

編 集 後 記

発行を2月1日から2月15日にさせて頂きましたが、
そうするとそうしたでエンジンのかかりが遅くなり、ま
た遅れてしまいました。申し訳ありません。

昨年は講演集の印刷の鮮明度いろいろな意見を頂
き、検討いたしました。今年の講演集を見てまたご意見
をください。

事 務 局

昨年の編集後記にいろいろご意見を頂きました。
お心を掛けてくださった皆様に感謝申し上げます。

いろいろな経緯があり、しばらくひきつづき事
務局をお預りすることにしました。昨年の編集後
記の内容で、更めて事務局をつづけるなど不見識
の極みではありますが、諸般の事情を鑑みてという
ことでお笑ください。

植 田 伸 夫